



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3497号 2017.2.2 発行

措置入院患者の退院後支援模索 負担増 戸惑う保健師ら 中日新聞 2017年1月31日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で起きた殺傷事件から半年が過ぎた。厚生労働省の有識者検討チーム（座長・山本輝之成城大教授）は昨年12月、最終報告をまとめ、措置入院患者の「退院後の支援の強化」を再発防止の柱として打ち出した。しかし、具体的に進めていく上での課題は山積。地域の精神保健に取り組む専門職や支援者たちには、戸惑いもある。（編集委員・安藤明夫）

最終報告書は、植松聖容疑者（27）が事件を起こす前に措置入院先から退院した後、通院を中断し、無断で一人暮らしをするなどしていたことから、「十分な支援を受けられなかった」と指摘。地域の中で見守っていくために、すべての措置入院患者について、措置入院を決める都道府県知事や政令市長が入院中から、退院後の支援計画を策定し、退院後は居住する自治体が計画に沿って支援する必要があると提言した。

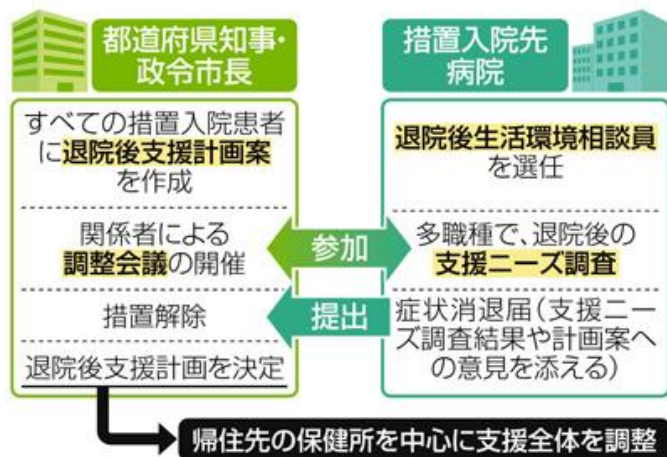
計画は、保健所、退院後の通院先の医師などによる調整会議を開き、入院中の病院からの意見も踏まえて決める＝図。支援の底上げ、連携強化が目的だが、保健所などの負担増も懸念されている。東海地方の都市部で、精神保健を担当する保健師は「必要な見守りは、今までもやってきたつもり。関係者を集めて調整会議を開くのは大変な作業で、現実的ではない」と話す。

保健所と福祉事務所の統合などで、実質的に職員数が減る中、精神保健の担当者の業務は多忙だ。精神障害を疑われる人が、近隣とトラブルを起こすなどして保健所に通報が寄せられるケースは、頻繁にあるという。事実関係を調査し、本人に精神科の受診を促すなど、時間のかかる対応が必要になる。周囲の理解不足がトラブルの原因と思える例も多いという。

措置入院では、入院先が遠隔地だったり、患者が退院後に引っ越す例も多く、支援の調整は大変だ。「日常から他機関と顔の見える関係を築くことが何より大切で、やり方は地域によっても違う。一律的に形を決めても有効ではない」と話す。

薬物依存症のリハビリ施設・三重ダルク（津市）の施設長で精神保健福祉士の市川岳仁（たけひと）さん（46）は最終報告について「精神障害者を社会から排除しない姿勢は評価できる」とする。一方で「植松容疑者の障害者への怒りの裏側には“どうせ俺なんか”という強い劣等感がうかがえる。管理の対象として見守るだけでは、こうした人を支えるのは難しい」と指摘する。

退院後の継続支援策の提言



三重ダルクでは、薬物依存症と発達障害の重複者など、さまざまな人たちが共同で暮らしている。治療のプログラムに消極的な人も排除しないようにと、2年前に「ソーバーリビング」という生活の場を外部にも設けた。つらい人生を歩んできた自分との「和解」が回復の目標で「そのために必要なものが、仲間とのつながり、暮らしの場」だと言う。

愛知県知多市で精神障害者などの自立支援に取り組むNPO法人「びすた〜り」の事務局長、高山京子さん（52）＝精神保健福祉士＝は「精神科の在宅診療もほとんどない現状で、医療と福祉のはざまをつなぐ人材が不足している」と指摘。「報告の理念はよいが、現状では苦労して調整会議を開いても、地域の事情を踏まえた建設的な意見交換は難しい」と話した。

相模原事件 2016年7月26日未明、相模原市の津久井やまゆり園に、元職員の植松聖容疑者が刃物を持って侵入。19～70歳の入所者が刺され、19人が死亡、27人が重軽傷を負った。植松容疑者は16年2月、障害者の殺害を示唆する発言を繰り返したことから、同市が措置入院を決定。翌月、「他害の恐れがなくなった」との判断で措置が解除されたが、その後の支援は途切れていた。

ロボットになぜ「弱さ」が必要なの！？——ロボットと生き物らしさをめぐって

シノドスジャーナル 2017年2月1日

岡田美智男氏インタビュー

自分ではゴミを拾えない「ゴミ箱ロボット」、「む〜む〜」の声にあわせぶるると揺れる「む〜」、相手の目線を気にしながらオドオドと喋る「トーキング・アリー」。岡田美智男さんは一見役に立たないながらも、目が離せない「弱いロボット」をつくっていると云います。本インタビューでは「ロボットになぜ弱さが必要なのか」をテーマに、人間はなぜロボットに心を感じるのかお話を伺いました。（聞き手・構成／山本菜々子）

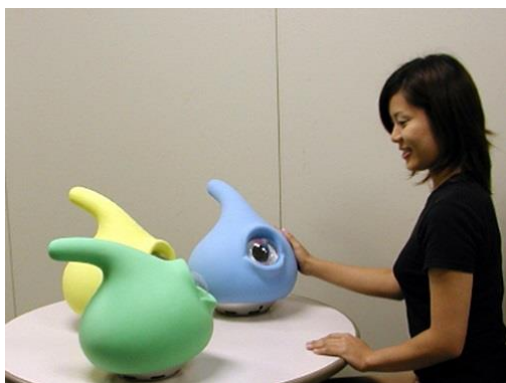
「弱いロボット」とは

——岡田さんが開発されたロボットたちを簡単に紹介していただいてもいいでしょうか。

もう16年くらい前になるんですが、はじめに作ったのがこの〈む〜〉というロボットです。目玉のような、幼児のような、というわけで、「こんにちは！」と話しかけると、幼児の喃語のような「む〜む〜」という声にあわせブルルンとした動きで応える。あるいは、積み木をかざすと、すこし考え込むようにして、「あかいろ！」と間違えて答えてしまうような。なにも役にたたないけれど、そこに居ないとなんだか寂しい、そんな存在感はどのようにして生まれるのか。このロボットでそのようなことを考えてきました。

また〈ゴミ箱ロボット〉というのは、ゴミを拾い集めようとしても自分ではゴミを拾えない。で、子どもたちからの手助けを上手に引き出しながら、結果としてゴミを拾い集めてしまうというものです。ゴミを拾い集めるロボットを作ろうとするなら、ゴミを見つけるためのセンサーやゴミを摘み上げるためのアームをつけて実現すればいいのですが、ここではちょっと他力本願というか、人を上手に使ってしまおうということですね。手伝ってもらおうと、ペコリと頭を下げる。で、手伝った方もまんざら悪い気はしない。そういうソーシャルな関わりを指向したなんです。

〈マコにて〉という、手をつないで一緒に並んで歩くためだけのロボットもあります。〈マコにて〉は、どちらがどちらの手を引くというわけではなく、子どもと一緒に歩くような感覚でただ手をつないで一緒に歩くだけのものです。人とロボットとが対峙しながらコミュニケーションするのではなく、人とロボットと並んだ関係でのコミュニケーションもお



もしろいのではないか思っています。

ぼくたちのつくるロボットは総じて、ちょっともどかしいとか、おぼつかない、たどたどしいとか、そういう頼りないロボットが多いですね。「弱いロボット」と呼んでるんですが、どこか不完全なところがあるんだけど、なんだかかわいい、放っておけない。そんな「弱さ」を内包しているからこそ、人との関わりとか、コミュニケーションを引き出せるのではないかと考えています。

その頼りなさといえば、3つのロボットたちが「ああでもない、こうでもない」と考え込むような、ちょっと頼りないカーナビなんかも開発中です。「どっちに行く?」「そろそろ、右に曲がったほうが……」「いや、もう少し先だよ」「そうそう」「ここを左にいくとケーキ屋さんがあるんだけどなあ」「でも、先を急がなくていい……」などとおしゃべりする。ちょっと頼りないくらいのほうがドライバーも「こうしちゃいられない」って、いくぶんは主体的になるんじゃないかと。

「人間らしさ」って?

——コミュニケーションについて探るロボットを考えたとき、見た目が「人間らしい」ロボットをつくらうとするのではなく、人間とかけ離れた姿のものをつくらうとしているのが面白かったです。

ぼくはもともとロボットの研究者ではなく、むしろコミュニケーションの認知科学的な側面について興味を持ってきました。コミュニケーションの仕組みを探るための道具としてロボットを作ってきたわけです。ロボット技術に関してはまったくの素人と言えるかもしれません。ですから、ヒューマノイドのような立派なロボットを作る技術がなかっただけなんです…… (笑)。

苦肉の策として、いろいろな機能を足し算していくアプローチではなく、むしろ〈ゴミ箱ロボット〉のような機能を引き算していくようなアプローチを取るようになっていたんですね。「ゴミを拾うのが技術的に難しいのであれば、まわりの子どもたちに手伝ってもらえばいいじゃないか」というように。

それと「人らしさ」ということを考えるとき、その姿をはじめから「人のように」ではなく、むしろ、それからはもっとも遠い「ゴミ箱」くらいからスタートしても面白いかなど思ったんです。その姿は「人らしさ」からはほど遠いんですが、他との関わりや関係性の中から立ち現われる「人らしさ」というのもあるのではないかというわけです。

——ロボットにとって「人間らしさ」はどの程度重要なのでしょうか。岡田さんは著書の中でASIMOがはじめて登場したときドキドキしたとおっしゃってましたね。

そうですね。ASIMOのふるまいをみていると、思わず「なにを考えているのか」「どこに向かおうしているのか」とこちらが考えてしまうようなところがある。結局、ぼくらが人の心を読もうとしてしまうのも、同じような身体を備えているからでしょう。その対象に自分の身体を思わず重ねてしまう。それは、そんなふうに重ねることのできる対象だからです。この水の入ったコップに対して、「コイツはなにを考えているのか」ってあまり思わないですよ。

目の前の相手がなにを考えているのか探ろうとしたとき、自らの身体がこの場に対して感じていることを手掛かりに、相手がなにを感じているのかを探ろうとするんですね。その対象に自分の身体を重ねながら理解することがコミュニケーションにとってはベースとなっているわけです。

たとえば、幼児がヨタヨタと歩きはじめるとき、思わずその背中を追いかけてしまいますよね。その重力に逆らいながらバランスをとるものに対して、ぼくらは思わず、自分の身体を重ねてしま



うことがある。〈ペラット〉というおぼつかないロボットは、倒立振子の原理によるんですが、そのヨタヨタした動きに対して、その様子を見入ってしまうということがある。そこにおもわず自分の身体を重ねてるんですね。

——ASIMOに心を感じるのは、私たちと同じ体の形をしているからなのではないでしょうか？

そうですね。でも、もっと基底のところでは「同型」なのではないかと。

ASIMOの方がコップよりも「私たちと同様な身体を備えている」ということなんですけど、それは必ずしも同じ姿である必要はないのです。むしろ、〈ペラット〉のように、周囲との切り結びの様式が似ていることが大切だと思っています。

どういうことかという、私たちの身体は外からみると完結しているように見えます。でも、実は周囲の環境に支えられながら自分の身体を調整しているという要素が大きいんですね。

たとえば、顔。自分の顔だけど、自分の内側から見えない。そういう顔が欠けた状態で人と関わるわけです。それでも不自由しないのは、自分の頭を動かす中で、その見えの変化から自分がいまどんな状態にあって、なにをしようとしているのかがわかる。

あるいは、ぼくがいまどんな表情で話しているのかは、目の前の山本さん（注：インタビュー）の表情に映し込まれた自分の表情を手掛かりにしているわけです。自分の身体を自分の内側からみると、それは閉じていない、不完結なんですね。そういう身体を備えている制約を、ぼくらの「弱いロボット」の研究では本源的な〈弱さ〉として捉えているわけなんです。

だから、自己完結していない、そんな〈弱さ〉を備え、周囲と上手に切り結んでいるロボットであれば、必ずしも人と同じような格好をしていなくても「同型」といえるのではないかと。アンドロイドやジェミノイドロボットなどでは「実体としての同型性」ということを追求するわけですが、一方で周囲との切り結びの様式が同じである「関係としての同型性」を追求していく。それによって、人に近づけていくというアプローチもあると思うのです。

ぼくたちがつくる〈ゴミ箱ロボット〉は、一生懸命にゴミを拾おうとするのだけれど、自分ではなかなかゴミを拾えない。その場でヨタヨタとしながら困っているだけです。そうすると、周りの人が見かねてゴミを入れてくれる。

その〈弱さ〉が他の人のアシストをうまく引き出すわけですね。「人間らしさ」とは、こうして他者からの支えの中でどうにか自己完結させていくという様式からたち現れてくるのではないかと。同様に、周囲との切り結びの中でどうにか自己完結しようとする姿が「生き物らしさ」を生み出しているのではないかと、と思います。

あのロボットなに考えているんだろうね

——岡田さんのつくるロボットには、目が離せない不思議な魅力があります。私たちがロボットをみると、どのような気持ちが生まれるのでしょうか？

認知哲学者のダニエル・デネットによれば、ぼくらがなにか動きのある対象を見るときに、いくつかの構えのうちのいずれかをとっているとされています。

ひとつは「物理的な構え」というもの。ここのペンがパタリと倒れた。その動作に対して、「あっ、疲れているのかな？ それで横になったのかな？」とは思わない。重心が偏って、バランスを崩して倒れたと解釈するわけですね。

そして、「設計的な構え」。時計がチクタク動いているのをみて、「これはうれしくて歌っているんだな」とは思いません。「だれかが設計したとおりに時を刻んでいる」という解釈する。

もうひとつは「志向的な構え」というもの。ASIMOの歩く姿をみているとき、おもわず「どこに向かおうとしているのか」と考えてしまう。なんらかの意図があって、それに合わせて合目的的に動いている、そんな解釈をするわけですね。

これまでの機械とロボットとの大きな違いというのは、わたしたちがその対象に対して「設計的な構え」ではなく、思わず「志向的な構え」をとってしまう点にある。普通の機械の

動作をみても、誰かが設計したとおりに動いているだけと思うのですが、ASIMOの飄々としたふるまいには、自らの意志である目的にむかっているように感じるんですね。ぼくたちの興味も、そこにあります。どうやったらロボットは人間に近付くのか？というより、どういう行動様式に対して人間はロボットに心を感じるのだろうか？と考えていることが多いのです。

「弱い」は自然なことだ

『弱いロボット』(医学書院)を出版して間もないころ、シノドスの編集長の荻上さんがTBSラジオの「DigTag コラム・チキチキ塾」というコーナーで、この本を紹介していただいたことがあります。荻上さんは、「なにかとくに結論があるわけでもない、とても主張の弱い本です」というような話をされていた。その時に思ったのは、この本の主張の弱さがいろいろな人の勝手な解釈を引き出している、その意味では「弱い本」なんだと(笑)。

いろんな方々に書いていただいた書評を読んでも、「あっ、そうそう、ぼくはこういうことを言いたかったんだ！」と自分で後から気づくことがある。読んでくださる方が新たな解釈をつけ加えてくれて、はじめて完結するような「弱い本」なのだと思ったわけです。

——「弱い本」ですか。「弱い文章」っていうのもあるのかもしれないね。

文章の表現があまりに強すぎると「伝える人」とそれを「受けとる人」とが非対称になってしまう。でも、伝える側がちょっと抑え気味にしていると、そこに解釈する余地が生まれて、一緒になって意味づけしようとする。そうすると、その意味を支え合うような対等な関係になれるんですね。

ぼくらのロボットでも、周りの人の参加するための余白って大切だなと思ってます。例えば、相手の目線を気にしながらオドオドと喋るような〈トーキング・アリー〉というロボット。一方的にどんどん話せばいいのだけれど、そういう自信もなくて、相手の目を気にしながら「あのね」「えーっとね」とたどたどしく話すものです。



相手の注意が逸れたときは、「ねえ、聞いてる？」と言いながら、相手の目線をこっちに引き戻そうとする。そうした関係では、そこに聞き手の参加する余地がうまれて、一緒になって言葉をつくっていく雰囲気になるんですね。

結果として言い淀みや言い直しの多い、非流暢な発話になってしまうんですけど、それが「聞きにくい」ということもなくて、むしろ聞き手に対する配慮とか優しさが生まれてくる。伝えようとする意志も伝わってくるし、言いたいこともなんとなく伝わる。聞き手も、そこに

参加できていることがうれしい。そんな喜びが生まれるんです。

たぶん文章も一緒に、「あーでもない、こーでもない」と言いながらだんだんと自分が伝えたいことに収束させていくような「弱い文章」があってもいいのかもしれない。それを読む人もその問題を共有しながら、「ああでもない、こうでもない」と読んでいくというのは結構必要なプロセスかもしれないね。

——「弱い文章」すごく憧れますが、やっぱり相手にゆだねるのは勇気がいりますよね。

この『弱いロボット』の帯には、「ひとりでできないもん」って書かれているんですけど、ふつうは「ひとりでできるもん」ですよ。

ぼくらって生まれてから今に至るまで、そして老いてからも、だれの手を借りることなく「ひとりでできること」を良しとするような文化の中で育ってきた。子どもを育てるときには、すこし手を焼きながら「はやくひとりでできるようになるんだよ」と願うし、一方で子どものほうも「もうひとりで靴下をはけるんだよ、すごいでしょ」って得意がっている。学校教育でも「テストはひとりで受けるものであり、だれの力も借りてもいけません！」という環境の中で人を育てている。ロボットも一緒に、ひとりの力でできる完璧なものを

目指そうとしてきた。

でも、私たちの身体の備える不完結さということを考えるとどこか無理がでてくるんですよ。

生き物は自らの動きを周囲にゆだねながら、周囲と一緒に行為を形作っている。なにげなく歩く時も、その一步を地面にゆだねながら、歩くという行為を作り上げている。「もうひとりで靴下をはけるんだよ！」と得意がっていた子どもも、壁に背にして、身体のバランスをとりつつ、靴下を履いていたりする。あるいは、相手に「おはよう」と挨拶をするときも、半ば相手にゆだねるようにして、挨拶という行為を作り上げているわけです。

——むしろ「弱い」ことこそ、自然で、人間らしいことなのだ。

今回のテーマである「ロボットになぜ「弱さ」が必要なのか」という問い。ぼくはいろいろな理由があると思っています。

身体的なコミュニケーションを成り立たせるには、「関係として同型性」というものが大切だということをおぼろげに知っていましたが、ロボットが自己完結したものだと、他との間でそもそもコミュニケーションは必要ない、というかコミュニケーションが生まれません。人と人との間で共同性を生み出している動因というのは、お互いの備える不完結さ、すなわち「弱さ」なのではないかと思うんです。

一つの例として、お掃除ロボットですね。これも「弱いロボット」なんじゃないかと思っています。ひとりで勝手に掃除してくれる便利なものですが、何日か一緒に生活してみると、彼らの弱さも気になってくる。椅子の入り組んでいるところで袋小路になるとか、ケーブルに巻きついてギブアップしてしまう、それと玄関などの段差に弱いとか。そんな弱さがわかってくると、スイッチを入れる前に、なにげなく椅子を並べ直し、ケーブルを整理している。すると、いつの間にか部屋も片付いていたりする。

この部屋を綺麗にしたのは誰なんだろうかと考えてみると、お掃除ロボットの力だけでもない。私ひとりで片付けたわけでもない。この「弱さ」がぼくたちに掃除に参加する余地を与えてくれた。ふつうの機械として考えたら、欠陥や欠点だった「弱さ」がぼくたちとの共同性を引き出しているわけです。

たぶん、完璧にお掃除できるロボットだったら、そういう共同性は生まれません。むしろ「お掃除してくれるロボット」と「お掃除をしてもらう人」という明確な役割が生まれる。すると途端に、「もっと静かにできないの？ もっと早く終わらないの？ この取りこぼしはどうなのよ！」と、このロボットに対する要求水準をあげてしまう。

お互いの役割の間に線を引いてしまうと、相手に対する要求水準をあげてしまうというのは、最近ではいろんなところで起こっているようなんです。教育現場だと、教える人と教えてもらう人。介護現場だと、介護する人と介護してもらう人。あるいは津波の被害にあうたび、この防潮堤をもっと高くせよという議論になる。「もっと、もっと」と相手に対する要求水準をあげてしまう。と、いろんなところが変に疲弊してしまうんですね。

そういう意味では、私たちに本源的に備わる「弱さ」が人と人との豊かな関係性を作り上げるためのカギになっているようなんです。

騙すロボット！？

——岡田さんがあるインタビュー（「頼りなさが生み出すもの 弱いロボットのちから」）の中で、「む〜をあまり外に出したくない」とおっしゃったあと、

“桜の咲く公園でひとりのおばあちゃんがぼつんと立っていたのです。そして、小さなぬいぐるみのロボットを抱っこしながら「きれいだねえ、ねえ、きれい、きれい」と桜を見ながら語りかけていたのです。その姿を見て、ロボット研究者として申し訳ないことをしてしまっているのではないかと、いたたまれない気持ちになってしまって。なにかとても痛々しいものを作っているのではないかと感じたのです。そのまま突き進んだら、「おばあちゃんをどう欺くか」という研究になってしまわないかと。”

と言われていて、非常に印象に残りました。「人間らしい」ロボットをつくらうとしている岡田さんが、ロボットに心を感じているおばあちゃんに申し訳なさを感じている。これは

どうということなのでしょう。

まだまだ技術としては未熟だと思うんですね。「コミュニケーションロボット」と呼ばれているけれど、人とのコミュニケーションを目指しているということだけであって、まだ達成できているわけではない。まだ疎通しあう関係にはなっていない。あくまでスローガンであるとか、願望にすぎないわけです。

「志向的な構え」を引き出すという意味では、ロボットに心を感じてしまうこともある。けれども、「そこに心を感じる」と、「そこに心があること」の間にはまだ大きな開きがある。〈心あるロボット〉と感じつつも、実際のところは〈心ない振る舞い〉を平気でしてしまう。どう〈心あるロボット〉のように見せるかという技術は、どう人を欺くのかを考えているようなものかもしれない。そういうものを高齢者の方々にまだ使ってほしくないというところが本音なわけです。そうしたロボットで自分の心を癒したり、お喋りの相手にするのは悲しすぎると思う。

——岡田さんのロボットに囲まれて、一人老後を暮らせたならなんて素敵なんだろうと思っていたので、それは以外なお話でした。

複数のロボットを相手に会話を楽しんでいる状況だと、例の痛々しさというのは、いくぶんは和らぐんですね。それはロボットの世界にぼくらが入り込んでいる。それは遊びであり、仮象世界でのものになるんです。子どもが人形相手に遊ぶのと一緒です。

でも、ロボットと自分が1対1で関わろうとすると、けっこうきついと思います。1対1だと、現実の世界でのやり取りになってしまう。ロボットに優しく語りかけても、ぼくらの何十年かの人生経験に配慮したような応答を返してくれるわけではない。そういう意味で、ロボットはコミュニケーションの研究の道具としては面白いけれど、現実世界で人間を相手にするのは幼すぎるし拙すぎる。

現段階でぼくたちが提供できるのは、おばあちゃんや子どもが犬をみんなでかわいがるような形で、そのロボットを媒介にして、人間同士のコミュニケーションを引き出すような、そういう場を構成することくらい。そういう場面であれば、なんとか使えるものなのではないかと思っています。



弱いロボット (シリーズ ケアをひらく) 著者/訳者：岡田 美智男

出版社：医学書院(2012-08-24) 定価：Amazon 価格：¥ 2,160

単行本(224 ページ) ISBN-10：4260016733

ISBN-13：9784260016735

岡田美智男(おかだ・みちお) 社会的ロボティクス

1960年生まれ。東北大学大学院工学研究科博士課程修了後、NTT基礎研究所情報科学研究部、国際電気通信基礎技術研究所(ATR)などを経て、豊橋技術科学大学情報・知能工学系教授。専門は、コミュニケーションの認知科学、社会的・関係論的ロボティクス、ヒューマン-ロボットインタラクションなど。著書に『弱いロボット』(医学書院)、『ロボットの悲しみーコミュニケーションをめぐる人とロボットの生態学』(共編著、新曜社)がある。

特別支援校生の就労率向上へ 技能検定を本格実施

神戸新聞 2017年2月1日

兵庫県教育委員会は2017年度から、県立特別支援学校高等部の生徒を対象にした「技能検定」を本格実施する。喫茶サービスや清掃の技術を客観的に評価する検定で、10段階で評価。特別支援校生の就労率が全国平均よりも低い状況が続く兵庫県で、各個人の技能に“お墨付き”を与えることで、就労率向上を目指す。(上田勇紀)

17年度当初予算案に関連費用を盛り込む方針。県教委はこれまで、企業関係者を交えて県独自の検定を模索してきた。16年度には「プレ検定」を行い82人が受け、手応えを得た。

今年7～8月、県内8会場で予定する本格実施では注文や配膳の技能を見る「喫茶サー

ビス部門」、モップやテーブル拭きで掃除する「ビルクリーニング部門」の2部門を行う。



さらに、商品の陳列技能などを見る「品出し・物流部門」については検定導入に向けた調査を行う。喫茶サービスマスターの検定でおしぼりを提供する受検者=2



016年8月、丹波市、氷上特別支援学校

検定では、独自に作った評価表を基に、講習を受けた教員や企業関係者が審査。10～1級までの10段階に分け、各級の認定証を渡す。生徒は就職に際し、この認定証を活用できるようになる。

県教委によると、特別支援学校高等部3年の県内の一般就労率平均は14年度、18.3%にとどまり、全国の28.8%と10ポイント以上の差がつき、都道府県別ではワースト3位だったという。県教委特別支援教育課は「公的な検定を活用してもらい、就職につなげてほしい」としている。

精神科医療 患者を地域で支えるには

西日本新聞 2017年02月01日

精神科に1年以上入院している患者を2020年度末までに、最大で3万9千人減らす目標を厚生労働省が示した。日本の精神科医療の長期入院は国際比較でも著しく多い。過去の隔離収容政策の影響といわれ、人権上の問題も指摘されている。

適切な通院治療と生活支援を受ければ退院可能な患者は少なくない。地域に精神障害者を支える態勢をつくるのが喫緊の課題だ。

厚労省によると、統合失調症などで入院している患者は、14年時点で約28万9千人だった。6割を超える約18万5千人が1年以上の長期入院患者だ。このうち10万人が5年以上も入院している。15年調査では、九州7県の精神科病床の平均在院日数は全国平均を上回っており、精神医療の入院偏重を改める必要がある。

目標値は各自治体の18年度以降の障害福祉計画に反映される。

厚労省は、目標の達成に向け、精神障害にも対応した「地域包括ケアシステム」の構築や、保健・医療・福祉関係者が協議する場の設置を自治体に促すという。

大切なのは号令に終わらせず、患者の声を聞いて実効性のある施策を着実に実行することだ。厚労省は04年、約35万4千床あった精神科病床を10年間で約7万床減らす目標を掲げたが、1万8千床減にとどまった。

患者の地域移行には、自宅やグループホームで暮らしながら、医療や福祉の支援を受けられる態勢づくりが不可欠だ。

訪問診療に熱心な医師や看護師、福祉専門職を育成する必要がある。退院促進や在宅医療の取り組みには手厚く診療報酬を配分する措置も検討すべきだろう。

入院患者には高齢者が多い。多様な介護、福祉サービスとの連携が欠かせない。精神障害者のグループホーム開設が地域住民の反対で難航することもある。精神障害に対する誤解や偏見も解消していきたい。

私たち市民一人一人が「心のバリアフリー」に向けて取り組むことが求められている。

